

国指定名勝 旧大乘院庭園の発掘調査 現地説明会資料

奈良文化財研究所 平城宮跡発掘調査部 平城第 336 次調査

大乘院の歴史

大乘院は一乗院いちじょういんとならば有力な興福寺の門跡寺院もんせきじいん<sup>(1)</sup>です。平安時代、京の皇族や有力な貴族は、強い影響力をもつ興福寺などに子女を出家させます。これらの子女が居住する特別な寺院のことを門跡寺院と言います。

平安時代、大乘院庭園の一角は元興寺の寺域でした。11 世紀の中頃、この場所に禪定院ぜんじょういんが開かれ、堂や塔もつくられます。禪定院から遅れること約 30 年の寛治 1 年(1087)、現在の奈良県庁がある場所に、興福寺の大乗院が開かれます。その後、元興寺の禪定院の経営は、興福寺の大乗院が兼ねるようになります。そして、平安時代末の治承 4 年(1180)、平重衡たいらのしげひらの南都焼き討ちによって大乗院は焼失。その翌年、大乗院は、この禪定院の地に移りました。以後、江戸時代まで、ここは大乗院の敷地として存続します。

大乘院庭園について

室町時代や江戸時代に、大乘院庭園が名園として名高かったことは、いろいろな史料からわかっています。その歴史をひも解くと、15 世紀に当時の大乘院門跡の尋尊じんそん<sup>(2)</sup>が綴った日記である『大乘院寺社雑事記』<sup>(3)</sup>に、庭園についての記載がみられます。それによると、尋尊は庭園の大改修を著明な庭師の善阿弥ぜんあみ<sup>(4)</sup>にゆだねたとあります。善阿弥は銀閣寺などの作庭をまかされた室町時代を代表する庭師です。室町幕府 8 代将軍の足利義政は、銀閣寺の庭園を作るときに、善阿弥に命じて、大乘院庭園から石を運ばせたという記録も残っており、このことは大乘院庭園が優れた庭園であったことを示しています。

かつて、大乘院庭園には、東大池ひがしのおおいけと西小池にしのおいけがありました。東大池は現在の姿と大きく変わりませんが、西小池は江戸時代の絵図には描かれていますが、現在では埋没してしまっています。

これまでの研究で、庭園の西側の敷地には、平安、鎌倉時代には寝殿造りの殿舎が、室町時代には

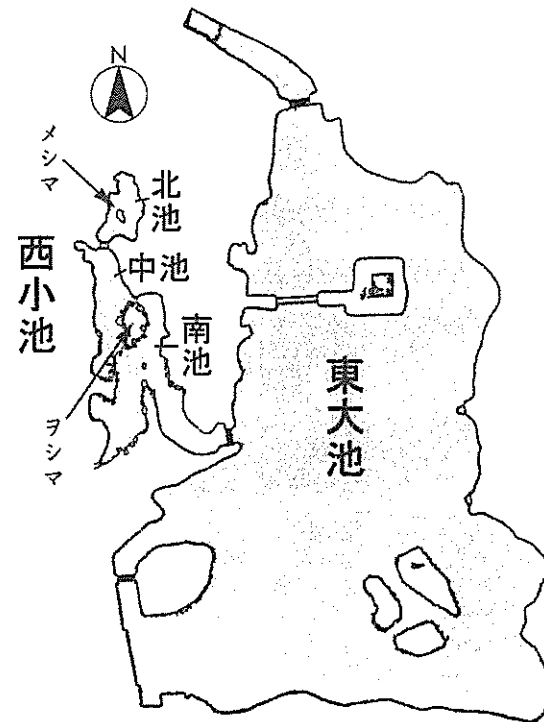


図 1. 池の部分名称

書院造りの建物群が、江戸時代には前代からの書院造りの建物群に加え、数寄屋造りの建物も数多く造営されていたことがわかってきています。各時代を通じて、大乘院は豊かな経済力を背景にして、建物や施設の造営をくり返し、池を含めた壮麗な庭園の改修や維持管理も続けられていたことも、文献史料から読みとることができるのです。

しかし、各時期の池の有無やかたち、構造については、まだまだ分からないことが多いのが現状です。なお、今回の調査では便宜上、最北に位置する部分の池を西小池の北池、それに南接する池を中池、ラシマ(雄島・男島)より南を南島と呼ぶことにします【図 1】。

発掘調査について

(財)日本ナショナルトラストによる保存修理事業に伴う調査として、奈良文化財研究所では 1995 年から国指定名勝旧大乘院庭園の発掘調査をおこなっています。東大池を対象とした調査から着手し、一昨年から西小池の解明に取り組んでいます。調査地は奈良市高畑町に所在し、調査面積は約 370 m<sup>2</sup>。10 月 1 日より調査をはじめ、12 月上旬現在、大乘院庭園に関する江戸時代から現代にいたる各期の遺構を検出しています。調査は 12 月末まで継続する予定で、今後、江戸時代以前の大乗院庭園の歴史をひも解く発見が期待されています。

今回の調査の目的

今回の調査区は、江戸時代末に描かれた『大乘院四季真景図』<sup>(5)</sup>【図 2】などから推定されている西小池の北端にあたります。種々の絵図によれば、西小池は小さな池がいくつか連なって描



図 2. 大乘院四季真景図(森家所蔵)

(1) 興福寺大乘院の場合、九条家または一条家の子息が門跡に入った。  
 (2) 尋尊(1430~1508)室町時代。父は一条兼良。  
 (3) 大乘院門跡が記した日記。その大部分は尋尊による。原本は内閣文庫として保管されている。  
 (4) 善阿弥(生没年不詳) 室町時代を代表する庭師。

(5) 大乘院門跡隆温僧正(1811~1875)が描かせた絵図。現在、模写もあわせて 3 枚が確認されている。

かれています。とくに『大乘院四季真景図』では、西小池がかなりの広さを持つように表現されています。しかし、大乘院の敷地内で想定される建物群の規模から考えても、絵図中の西小池は、かなり誇張されて描かれているのではないかと指摘されていました。

明治維新直後、<sup>はいぶつさしやく</sup>廃仏毀釈<sup>(6)</sup>による仏教界衰退の流れのなかで、大乘院の解体に伴って庭園も荒廃し、とくに西小池は放置されたまま、埋没したものと思われていました。事実、明治年間以降の地形図を見ると、東大池は存在するものの、西小池を表したものはありません。

今回の調査の目的は、この西小池が、どのような池であったのかを解明するとともに、その造成から埋没にいたる過程を、歴史的に位置づけることです。

### 調査の成果

今回の調査では、完全に埋没してしまっていた西小池の北側部分が、ほぼそのままのかたちで姿をあらわしました。元禄年間(1688-1704)に描かれたとされる『大乘院境内図』を写した図<sup>(7)</sup>と比較すると、ほとんど一致する場所に北池、中池の一部、メシマ(雌島・女島)の存在が確認されました【図3】。さらに、北池に水を流し込む階段状の石組施設(階段状石組)や、底を漆喰でかためた溝(石組溝)など、この池と関連する諸施設も発掘され、絵図からは読み取れない池の細部を見ることができました。さらに、中池との間に設けた水路には、幾度かのつけかえが行われた形跡があるなど、大乘院庭園の実態や歴史を解明する上で重要な知見も得られました。そして、西小池は江戸時代末から明治時代のはじめ、2時期にわたって埋め立てられたことも判明しました。今回の調査では西小池の残存状況が、比較的良好であることも確認することができました。

ところで、今回の調査では、明治、大正時代、さらに昭和の戦中、戦後の遺構がいくつか検出されています。郷土史の資料や、古老への聞き取り調査などを通じて、近代のあゆみをあらためて追跡しました。まず中池埋没後、ここに飛鳥小学校の前身となる小学校が建設されます。明治33年(1900)に小学校が移転した後、大乘院庭園は荒地と化します。そして、大正年間には建設会社の資材置場になります。しかし、昭和のはじめには、すでにその倉庫はなく、昭和3年(1928)になると奈良ホテルの施設としてテニスコートがつくられます。やがて第二次世界大戦が始まると、テニスコートも食料生産のための田畑と化し、その一角には防空壕がつくられました。戦後、奈良ホテルは進駐してきた米軍の幹部用の宿舎となるのですが、その時、防空壕は壊され、埋められて、そこに米軍用のレクリエーション施設としてテニスコートが再建されました。このテニスコートは、昭和30年代まで存続するのですが、国鉄(JR)の宿泊施設(現大乘苑)が建設された後は、駐車場兼ロータリーとして、現在に至っています。

このように、今回の調査区が大乘院廃絶以降もさまざまな歴史の舞台となってきた大乘院庭園の沿革もあわせて掘り起こされたのです。

(6) 仏教寺院や僧侶を排斥する思想や行動。明治政府は江戸時代の仏教国教化政策を否定し、神道国教化政策をすすめたため、明治初年には全国的な運動として展開する。興福寺をはじめ奈良の大寺院も大きな痛手をこうむった。

(7) 雑誌『風景』第6巻第3号 1939年に掲載。戦前、市道肘塚線の建設に際して、大乘院保存問題がわきあがり、大乘院庭園に関する調査、研究がすすめられる。その座談会において、紹介された絵図の模写。現時点でオリジナルの絵図については調査中。

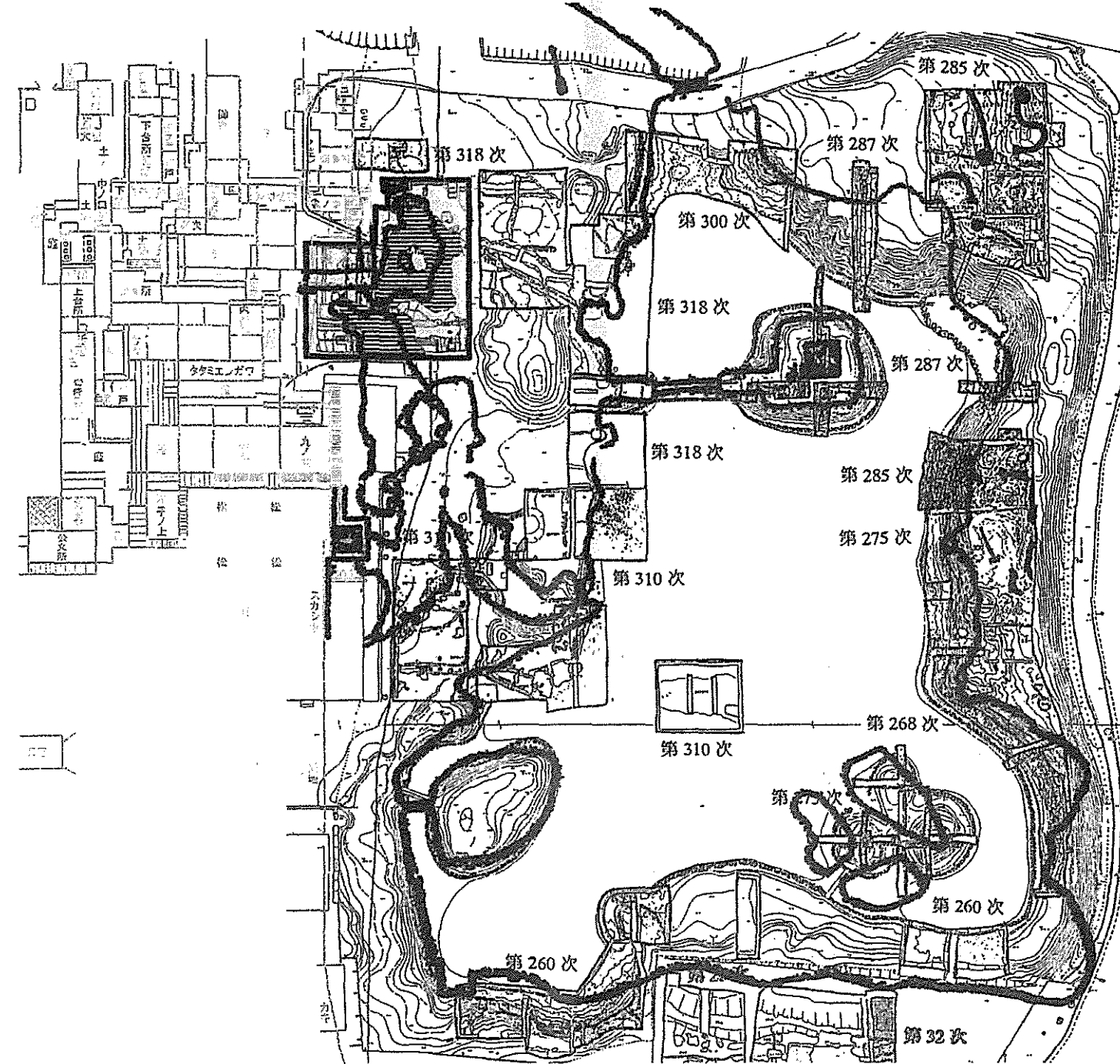


図3. 今回の調査区(灰色部分)と絵図との比較

### 調査結果の詳細

以下では、今回の調査結果について、各時期、遺構ごとに詳しく説明します。

#### I 期 江戸時代の遺構

**漆喰池** 底と壁を黄橙色の漆喰でかためた池。昨年度の調査でも検出されており、その南端部分にあたる。池の底は南に高くなっており、漆喰池と階段状石組の間には硬くしまった部分がある。南端の一部が削平されているため、北池との関連は確認できないが、漆喰池からあふれた水を、硬化した部分に通し、階段状石組に流し落とすという仕組みであったと推測している。

**階段状石組** 直径10cm前後の礫の上に20~30cmの石を並べてつくった階段状の石組。北池の

汀に接する。二段あり、上段の幅約 2m に対して下段の幅は約 1.3m にすぼめられている。比較的良好に残る東側部分は平らな石を側石として据えており、西側部分にも側石の抜取穴がある。こうした構造から、水を北池に流した小滝と考えられる。

**石組溝** 約 40cm×15cm の長方形の切石を両側に並べた溝。北池に流れ込む。溝底は漆喰池と同様に黄橙色の漆喰。この溝の水源の施設については不明。

**浄水施設** 北から流れてきた水を浄化させる施設。いったん水を溜め、不純物を沈下させ、上澄みを池の中に流していたと考えられる。

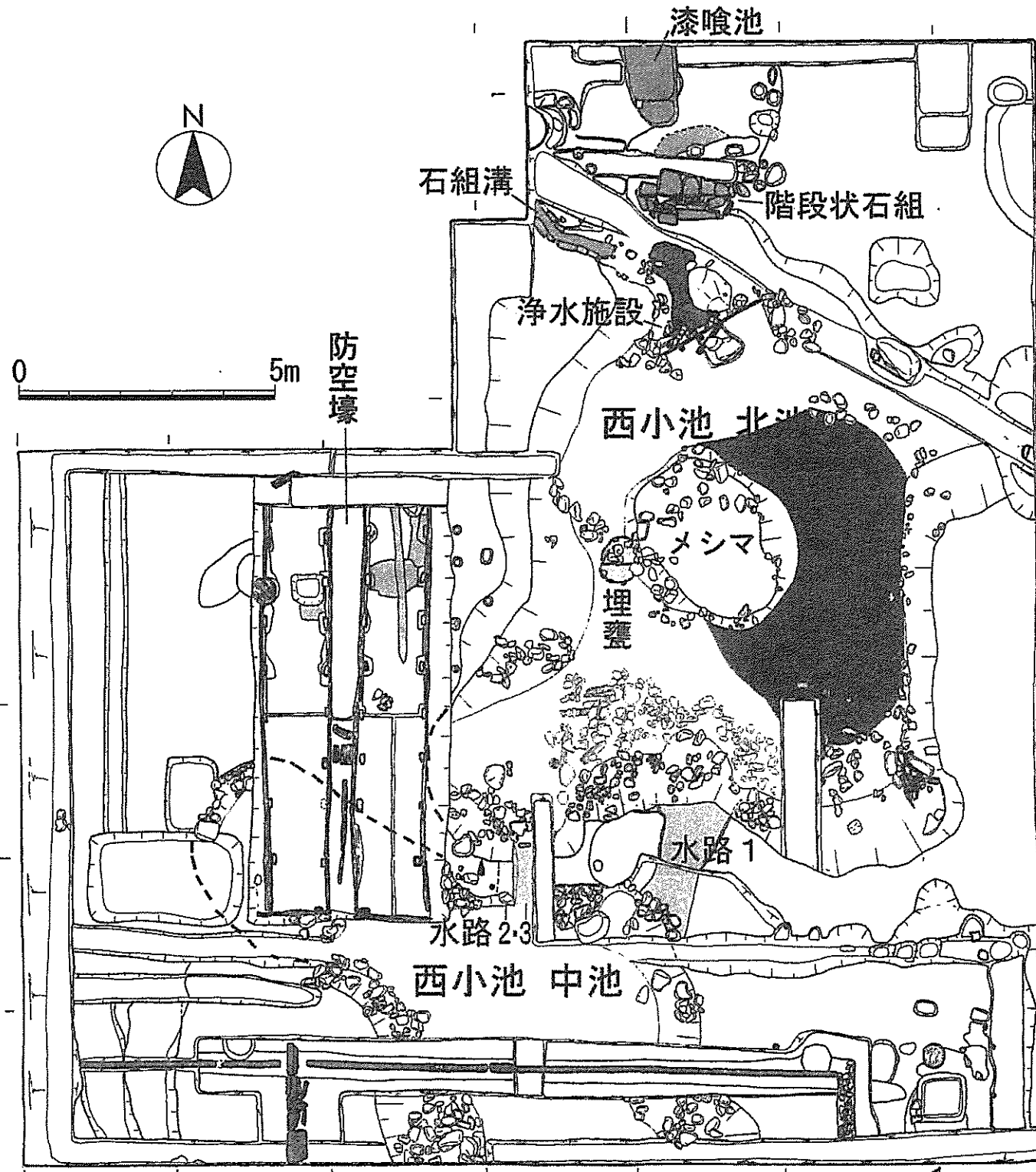


図4. 今回の調査区 遺構図

**西小池北池** 池の中の東半分と西半分で異なった様相を呈する。東部分での深さは 10~20cm ほどで、池底に砂利を敷いている。西半分はやや深く、水深 40~60cm ほどであったと推定される。

いずれにしても北池は東大池などと比べると浅い。中央には島があり、『大乘院四季真景図』に描かれたメシマ(雌島・女島)であろう。島のすぐ西には埋壘があり、蓮などの水生植物を植えた可能性もある。池底に堆積した腐植土層は上下2層に分かれ、下層からは江戸時代の土師器や陶磁器、瓦が、上層や、さらにその上の埋立て土からは石板や硯、遊具などが出土している。後で説明するように、明治初期に大乘院の建物の一部は、更新舎という学舎として利用されていたのであるが、こうした文具などはこの学校に関する遺物とみられる。従って、明治時代のはじめには、北池は、まだ池として存続していたと思われるが、この後、北池は大量の砂利や粘土で一度に埋め立てられる。この埋立て土の遺物からみて、明治 16 年(1883)、中池にあたる場所に 鶴小学校(この時、飛鳥小学校に改称)の校舎が新築された時点であると考えている。

**西小池中池** 西小池の中央部分にあたり、南池を経て、東大池に続く。池底に堆積した土から江戸時代の土師器、陶磁器、瓦などが出土している。埋立て土からは小学校に関連する遺物は検出していないことから、明治時代のはじめ、おそらくは明治 5 年(1872)以後の大乘院建物が処分されるなか、更新舎(鶴小学校)の開校に伴って埋め立てられたのであろう。

**水路** 北池と中池をつなぐ3時期の水路が検出された。護岸の状況などから、まず水路1が北池と中池をつないでおり、のちに水路2に付け替えられたと考えられる。その後、水路2を埋め、同じ位置に縮小して水路3が掘られる。水路3を埋めた土から、小学校に関連する硯などが出土しており、北池と同時期に埋め立てられたとみられる。『大乘院四季真景図』などをみると、北池と中池の間には細長い石橋が渡されているが、この水路上に架けられたものとみられる。

## II 期 近代の遺構

明治時代はじめの廃仏毀釈などにより、大乘院家が急速に衰退した後、とくに庭園西側部分の利用形態が明らかになるとともに、江戸時代の遺構の残存状況や大乘院庭園が現在にいたる推移を考える上で重要な知見を得ることができた。

**II a 期 明治時代** 今回の調査では、確実にこの時期に比定される遺構は検出されていない。郷土史家の藤田庄二郎(号は祥光)の記録(昭和初め頃作成。現在、奈良県立図書館所蔵)によると、大乘院建物のうち内御殿、東林院殿、別殿は、明治 7 年(1874)に更新舎という学舎となり、明治 8 年(1875)には他の学舎と統合して鶴小学校となる。児童が増加したことに加え、校舎の破損が著しかったため、明治 16 年(1883)にはこの学舎をとりこわし、大乘院跡に学校を新築して飛鳥小学校と改称したとある。さらに明治 33 年(1900)には現在の場所に移転したことが『飛鳥百年史』などに記録されている。今回の調査では、遊具や勉強道具が多数出土しており、小学校として利用されていた時期のものと考えられる。

**II b 期 大正時代** 調査区南側、テニスコートの造成土の下からコンクリートの建物基礎を検出した。その建築工法や使われている金具(羽子板ボルト)からみて大正時代以降に用いられたものである。また昭和初めの地図はこの場所に建物がなかったことを示している。藤田氏の著作には、大正年間、土木業者上田組の資材置場になったとあり、この建物基礎がそれに相当すると思われる。

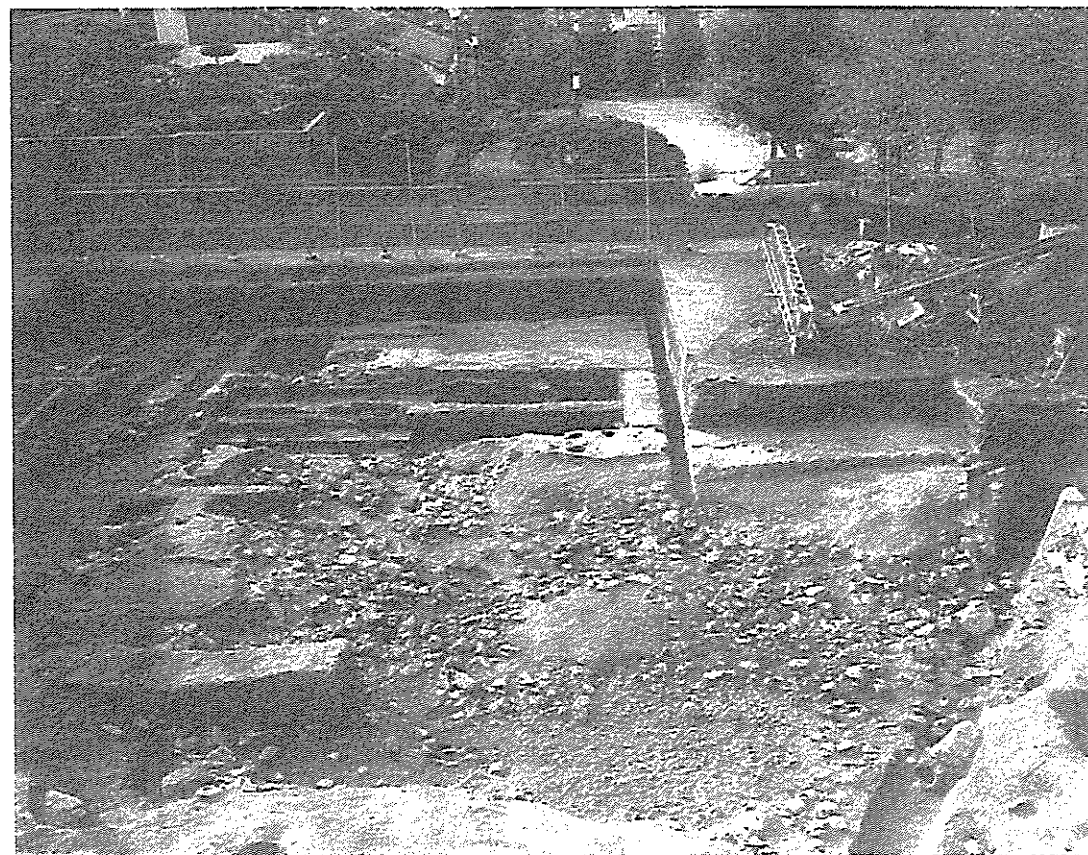
**Ⅱc 期 第二次世界大戦中** 幅 1.3m 前後の防空壕<sup>8</sup>が 2 基、東西に並んで検出された。南北の長さは今回の調査で南側 13m 分を検出しているが、昨年度の調査でも、その北側を検出しており、これをあわせると少なくとも 25m ほどの奥行きを持つことになる。調査区は当時の奈良ホテルの敷地内にあたる。奈良ホテル元従業員に伺ったところ、これは奈良ホテル従業員用の防空壕であることが判明した。

**Ⅱd 期 第二次世界大戦後** 調査区東半全域にわたって、粘土と石炭ガラを互層にしたテニスコートの基礎部分を検出した。『奈良ホテル物語』によれば、昭和 3 年(1928)には奈良ホテルの施設としてテニスコートが建設されている。しかし、今回検出したテニスコートは、昭和 20 年(1945)以降、奈良ホテルが米軍に接収された時期に、再建されたテニスコートであると思われる。なお、テニスコートは昭和 30 年代まで使われていた。

**Ⅱe 期 昭和 30 年代以降** 以後は国鉄(現 JR) 宿泊施設大乘苑の駐車場兼ロータリーとして、今日に至っている。

### 今後の課題

前述したように、西小池がいつ造成されたのかという点は大乗院庭園の歴史を考えるうえで重要な問題です。この点について、現段階で確実な所見は得られていません。今後、予定している遺構の断ち割り調査などを通じて、西小池の造成時期に関する手がかりが期待されます。



2001.11.27 撮影

(8) 古老によると、奈良での防空壕の作り方のひとつのパターンとして、学校の校庭の一面などで地面を箱形に掘りくぼめ、内壁よりに柱を立て、壁との間に横板を落とし込み、天井は 6 尺丸太を並べて、その上にむしろを敷き、土を 1 尺ほどの厚さに置いたという。今回、検出した防空壕もこういった工法でつくられている。

## 大乘院庭園略年表 (今回の調査区を中心にまとめる)

### <前近代>

- 康平 1 年 (1058) 成源が元興寺別院の禅定院を当地に開く。
- 寛治 1 年 (1087) 隆禅が大乗院を興福寺地の東方(現在の奈良県庁)に創建する。
- 治承 4 年 (1180) 平重衡の南都焼き討ちによって、大乗院が炎上する。
- 養和 1 年 (1181) 大乗院を禅定院のあった当地に移転する。
- 宝徳 3 年 (1451) 大乗院の大半が焼失する。翌年より、復興作業が開始される。
- 寛正 4 年 (1463) 大乗院門跡の尋尊が善阿弥に庭園の修理を依頼する。

### <近現代>

- 明治 1 年 (1868) 神仏分離令がだされ、廃仏毀釈が展開する。
- 明治 7 年 (1874) 大乗院の建物を更新舎(翌年、鶴小学校と改称)の学舎とする。  
この頃、西小池の中池が埋められる。
- 明治 16 年 (1883) 大乗院の建物を壊して校舎を改築し、飛鳥小学校として開校。  
この頃、西小池の北池が埋められる。
- 明治 33 年 (1900) 当地から飛鳥小学校が移転される。
- 大正年間 土木業者上田組が物置場として使用。
- 昭和 3 年 (1928) 奈良ホテルがテニスコートを設ける。
- 第二次大戦中 奈良ホテルの従業員用の防空壕がつくられる。
- 昭和 20 年 (1945) 敗戦にともない奈良ホテルが米軍に接収される。  
この頃、テニスコートが再建され、昭和 30 年代まで使われる。
- 昭和 33 年 (1958) 国鉄の宿泊施設(大乘苑)が建てられる。  
この頃、駐車場・ロータリーがつくられる。